

「沖縄経済の発展段階：今後はクリエイティブ人材定住が鍵に」

沖縄ファンクラブ副会長 大澤 真

沖縄に日本銀行那覇支店長として赴任し、沖縄経済と深く関わるようになってから13年が経過しました。沖縄との出会いが、地域経済活性化というテーマとの出会いをもたらし、それまで四半世紀国際金融マンとして過ごしてきた私の社会人生活を結果として大きく転換させることになりました。4年前に起業しましたが、現在は沖縄に限らず地域経済を支えるファミリービジネスの支援が業務の柱となっています。また、政府の沖縄関連諸会議委員や、沖縄ファンクラブ副会長、東京泡盛クラブ会長という役割をいただき、沖縄応援団の一員として最低月一度は沖縄を訪れています。

赴任当時2000年代初の沖縄経済は、基地依存、公共工事依存と言われていましたが、よくよくみると民間主導の観光産業が主力エンジンとしての役割を交代する時期でもありました。沖縄経済同友会で県に先駆けて沖縄経済21世紀ビジョンを作成した際、「沖縄観光は日本観光のフロントランナーになる」と主張した際には楽観的すぎるとの指摘もありましたが、その後沖縄観光の多様化・重層化、グローバル化は予想をはるかに上回るスピードで進展し、沖縄のリーディング産業、日本観光のフロントランナーの地位をあっという間に確固としたものにしてしまいました。観光が地域経済をリードする新しい経済モデルを日本で初めて実現したといっても過言ではありません。リーディング産業としての沖縄観光は、同時に非常に大きな経済波及効果をもたらしました。それは新たな生産活動、雇用、所得を産み出すという形で、一次産業から三次産業まで様々な産業分野に及んでいます。

これを、発展段階で見ると、沖縄観光への今後の示唆もみえてきます。まず第一段階、初めて沖縄観光を経験する人は、修学旅行、新婚旅行、社員旅行、家族旅行、インバウンドなどその形態は様々でしょうが、この段階は沖縄観光を「認知する」という段階です。観光産業サイドが提供する商品やサービスを受動的に受け入れる段階と言ってもよいでしょう。次にリピーターになる段階では、休養・癒し、スポーツ、食、文化、歴史等など特定の訪問テーマに関心を持ち、それを個々に深堀していくことになります。

沖縄観光は、ここしばらくはインバウンドという第一段階の新規経験者が牽引する形で成長することが予想されますが、その後はリピーターが重視するテーマごとに如何に新しい魅力を提供できるかが発展の鍵になります。一度フロントランナーになったとしても不断の努力を怠ればその地位をすぐに追われることになってしまうのです。

ではリピーターの次の発展段階は何でしょう。それはロングステイや定住です。欧米でバケーション・オーナーシップと呼ばれる一週間から数か月におよぶ住居の期間区分所有権の売買取引も離陸寸前です。そしてなにより経済に大きな波及効果をもたらす可能性が高いのは、創造的な活動を行うクリエイティブ人材の定住です。芸術家、技術者、経営者、弁護士・会計士・医師等のプロフェッショナル人材です。こうした人たちが住環境、ビジネス環境としての沖縄の魅力に引き寄せられ、欧米で言うクリエイティブ・シティを形成していくことになるのです。事実、こうした動きは内外資本の助けを借りて起こりつつあります。先日沖縄で出会った若手経営者は、ドイツ企業の子会社として次世代半導体を沖縄で生産する事業に参画していました。スイスのクリーンルーム製造会社も沖縄に魅せられた日本人経営者の意志で沖縄を日本本社にしました。製造業は育たないと言われ続けた沖縄ですが、沖縄に魅せられた経営者と海外資本がその呪縛から解こうとしているのです。

沖縄と出会い、魅せられ、将来の移住・定住も夢見ている自分ですが、その沖縄経済がフロントランナーであり続けることに少しでも貢献できればと考える日々です。その中で沖縄ファンクラブが果たすべき役割は何か、ファンクラブの皆様と一緒に考えていきたいと思っています。